

特別講演「ごんぎつねはなぜうたれたのか」

保坂重政 先生（新美南吉研究家）



ご紹介いただきました保坂でございます。私はアナログ人間のため、お話だけにさせていただきます。

今回、この研究会からいただいたテーマは、「ごんぎつねはなぜうたれたのか」というものです。「ごんぎつね」は、昭和30年に初めて、ある教科書会社の国語教科書に掲載されました。昭和55年以降には、すべての教科書会社の国語教科書で、4年生の教材として取り上げられるようになりました。すべての教科書会社で、まったく同じ教材に掲載しているのは、非常に珍しいことで、現在では「ごんぎつね」だけです。したがって、今40歳以下の方は、「ごんぎつね」の物語を小学校の国語で学習することになります。このように新美南吉は、宮沢賢治と並び称される、高い評価があると言えます。以前は、児童文学や教科書の中の物語では、「死」というものはタブー視されていました。それを敢えて取り上げた教科書会社の編集者の慧眼は、賞賛に値すると思います。

ではここで、新美南吉が「ごんぎつね」を書き上げた背景についてお話いたします。もうご存知だと思いますが、新美南吉は29歳と7ヶ月で亡くなっています。したがって、創作活動は非常に短い間に限られています。この「ごんぎつね」は、南吉が18歳のときの作品です。彼が愛知県の旧制半田中学校の生徒であったときに、すでに文学に目覚めていて、友人たちと同人誌を作ったり、作品を発表し合ったりしていました。そのときの彼の日記に、「物語には悲哀がなければならない。悲哀は愛に変わる。自分は悲哀即ち愛を含める物語を書いていこう。」と書いています。すでに中学生（旧制）の段階で、自分の目指す文学作

品の方向性を定めていたのです。そして、まだ作品を十分書いていない段階で、自分の作品は、自分の天性や性質を含んでいると考え、作家として大成することを、中学生の段階で強く意識していました。このような背景があって、18歳で「ごんぎつね」という作品を著したのです。

作品には、作家の生活観や人生観が反映されると思いますが、新美南吉の場合、4歳のときに母親を病気で亡くしています。彼の父親は、すぐに後添えをもらい、それから彼は、その継母に育てられていきます。その継母は、周りからはできた人だと言われていましたが、南吉少年にとっては、なかなか馴染めない多感なところがあったようです。そのような経緯があって、小学校2年生のときに、一人暮らしのおばあさん（新美姓）のところに養子縁組に出されてしまいます。南吉の後に生まれた異母弟を含めて4人で生活をしていたところに、一人だけ引き抜かれて養子縁組に出された体験は、南吉にとって、とてもつらい体験だったようです。結局、そのつらさに堪えきれず、親元に返されてしまいます。しかし、そのときに養子縁組は解かれなかったことで、本名の「渡辺」姓を名乗れず、「新美」姓を名乗ることになるのです。後年南吉は、孤独感に苛まれながら、自らと対峙し、感性を磨いていく様子を記しています。その当時、新聞や雑誌くらいしか情報を得る手段がありませんでした。その中で、南吉は、内外の文学を読み漁りました。そこから、新しい知識が蓄積され、感性がさらに磨かれていったのだと思います。南吉はこのようなつらい体験が、自らの作品の原点になり、その寂寥感が、自分の筆を推し進めてくれたと、後年の日記につづっています。ちなみに南吉は、非常にまめに日記を書いていました。このことで、南吉の生い立ちや考え方が明らかになり、新美南吉研究には欠かせない資料となっております。話が少し横道に逸れましたが、このような幼少期のつらい体験が、新美南吉の文学作品の原点になっていることは間違いのないことだと思います。

南吉の父は昼職人で、中学校卒業後に上の学校に行くことを反対していましたが、周囲の推薦などがあって、岡崎師範学校を受験しました。しかし南吉はそもそも虚弱体質だったようで、それが理由で受験に失

敗してしまいました。南吉は、中学校時代から非常に成績が優秀で、もう一人南吉と首席を争うほど優秀な生徒がいました。その生徒は八高に見事合格し、南吉は不合格であったということで、彼は孤絶感、焦燥感に苛まれました。そんな折、地元の小学校に代用教員の口があり、南吉は代用教員となりました。そこで元気な子供たちと毎日過ごすようになって、本来もっていた、児童文学への志向が目覚めてきました。ご存知だとは思いますが、当時児童文学の近代化に非常に大きな影響を与えた雑誌「赤い鳥」に南吉は童謡を投稿しました。その作品が北原白秋の目に留まり、昭和6年、この雑誌「赤い鳥」に掲載されることになりました。それから毎月のように、北原白秋の選で、南吉の童謡が掲載されるようになりました。南吉は、「おれは白秋に認められたぞ」と、友人に宛てた手紙に書いています。

代用教員をしている小学校が夏休みに入ったところで、「ごんぎつね」の執筆にかかりました。それまで「赤い鳥」には童謡のほか、童話も何本か掲載されていて、それが自信となって、「ごんぎつね」を書き上げることができました。そして、この作品が見事、「赤い鳥」の昭和7年新年号に掲載されました。

受験に失敗し、焦燥感に苛まれていた一方で、北原白秋に認められたという自信が、南吉を上京させる後押しをしてくれたのです。その後、東京外国語学校（現 東京外国語大学）に入学し、ここで4年間を過ごすこととなります。この学校は外国語学校ですので、在籍している4年間の間に、たくさん外国の近代文学とも出会うことになり、多くのものを学ぶこととなります。これが、南吉の作品に非常に大きな影響を及ぼしました。

南吉の初期作品のテーマに、動物と人間が心を通わせるというものがあります。南吉のもう一つの代表作として、「手袋を買いに」がありますが、この作品も、このテーマに基づいて書かれています。「ごんぎつね」は、焦燥感と高揚感がない交ぜになっている状況で書かれたものです。そして「ごんぎつね」の「ごん」には、人を恋する南吉そのものが投影されています。たとえば、作品には「ごん」のいじらしいまでの償いのしかたが描かれています。この場面がいちばん子どもたちを感動させる場所です。しかし、結局「ごん」は兵十に撃たれてしまいます。兵十がごんに駆け寄ると、土間に栗が固めて置いてあったのが

目に留まり、はじめて、栗や松茸がごんの侘びだったことに気づくのです。兵十は、「ごん、おまえだったのか。いつも、栗をくれたのは。」と問いかけ、ごんは目を閉じたままうなずき、兵十の手から火縄銃が落ち、筒口から青い煙が出ているところで物語が終わるのです。この最後の「筒口から青い煙が出る」ということで、南吉は「ごん」が死んでしまったことを暗示しているのです。ただ、「ごんは目を閉じたままうなずき」とある部分は、南吉の第一稿では、「ごんはうれしくなりました」と表現しています。それが発表の段階で、「ごんはうなずきました」となったのです。これは南吉本人が最後に変えたのかどうかは、はっきりわかりません。そこで、どちらの表現が良いかという議論があるわけですが、南吉は単行本を出版する際にも、「ごんはうなずきました」と表記しています。この背景には、南吉の孤絶感と高揚感がない交ぜになっており、その状況でこの作品が書かれているという事実があります。その意味では、(本当は第1作目ではありませんが)記念すべき第1作と言っても良いと思います。

先ほども申しましたように、南吉の創作のテーマは、動物と人間が心を通い合わせることであるわけです。もう一つの作品である「手袋を買いに」では、子狐に手袋を買ってあげたいと、母狐は子狐の片手を握って人間の子供の手に変えた。そして子狐に、町の帽子屋へ行って戸を少しだけ開けたら、人間の方の手を出して「手袋をください」と言うように、と教えた。間違っただけで狐の手を出してしまうとひどい目に遭うからと。子狐は町に着くと帽子屋を見つけ戸を叩いた。帽子屋が戸を開けた拍子に差し込んだ光がまぶしくて、子狐はつい狐の方の手を出して、「手袋をください」と言ってしまった。帽子屋は、狐だなと思ったけれども出されたお金が本物であることを確認すると黙って手袋を渡してやった。帰り道、家の中から聞こえる子守歌を聴きながら帰った子狐は母さん狐に「人間ってちっとも恐くない」と、間違っただけで手を出したけれど帽子屋は手袋を売ってくれたことを話した、という物語です。この最後の場面で、物語を読んだ子どもたちは安堵します。人によっては、母親が怖いと思っているところに子狐を一人で向かわせるなど、この作品は好きではないと言います。また、片方だけでなく、両方の手を人間の手にしてあげれば良い、という人もいます。私は、童話というものはそういうものではないと思

います。この物語は、無邪気な子狐と、心優しい帽子屋の主人が、ほとんど言葉を交わさない中で、心を通い合わせているということ。このことが、南吉が言おうとしている調和の世界なのです。

南吉の作品は、童話と小説を合わせて200編ほどありますが、大きな争いのことが描かれているのは本当に数少ないです。学生時代にプロレタリア文学に傾倒したころの「塀」という小説が、南吉にしては珍しく争いごとが書かれている例外的なものです。それ以外の南吉の作品はすべて調和の世界を求めるものとなっています。

南吉が生まれ育ったところが愛知県の知多半島という温暖なところで雪はほとんど降りません。しかし、南吉を物心両面で支えてくれた異聖歌（たつみせい）の奥様のふるさとである長野県を經由して、東京から地元に戻るときの雪景色が、「手袋を買いに」の原体験となっているのではないかと思います。郷里に帰った南吉は、車窓から見た風景を友人にこう伝えています。「白樺とカラマツと谷底の人家と、山の星の美しさと太いつららと灰色の空と、…限りなく美しい高原の冬に心を針のようにとがらし、感じ、悲しみ、わびぬれ、よろこび、明るみ、私は渡鳥のような痛々しく、小さい魂をともして旅をしたのでした。」この美しい書簡からは、「手袋を買いに」の中で描かれた美しい雪の情景が、いつどこで生まれたかを知ることができます。

さて、「手袋を買いに」の終わり方についてですが、子狐が首尾よく手袋を買って帰ってきたとき、母狐は非常に安堵します。最初の原稿では、「ほんとうに人間がいいものなら、その人間を騙そうとした私は、とんだ悪いことをしたことになるのね」とつぶやいて神様のおられる星の空をすんだ眼で見あげました。」とあります。そのようなメルヘン調の終わり方をしていました。しかし、10年後くらいに推敲し、最後の部分をすべて書き換え、「人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」と2回つぶやいて終わりにするという、劇的な終わり方に変えています。この辺に南吉の思想の高まりと変化を見ることができるとは思いません。

この「手袋を買いに」は、「ごんぎつね」と並んで代表作ということになっていますが、人によっては、「ごんぎつね」よりも「手袋を買いに」のほうが好きだと言う人が多いのです。実は、美智子皇后が、南吉の作品を小さいころから読み聞かせられ、大きくなってからも続けて読んでい

世界児童図書評議会でも基調講演をされたときに話されていました。それだけではなく、いろいろなところで新美南吉の作品のことに触れられています。美智子皇后の歌集の中に、「手袋を買いに」を詠ったものがあります。「里にいでて手袋を買ひし子狐の童話のあはれ雪降るゆふべ」という詩です。それだけ、美智子皇后はこの作品を気に入られたのだらうと思います。

南吉は、東京外国語学校で4年間を過ごし、海外文学について研究し、影響も受けています。ちょうどそのとき書いた「外から内へ」という児童文学評論がありますが、これはファーブル昆虫記を援用しながら書いているのですが、南吉のその後の立ち位置をはっきりさせた、非常に重要な評論だと思います。南吉は、昆虫を外側から見るのではなく、昆虫の中に入り、昆虫の触覚や味覚などをおして感じたことを作品にしていこうと決意したことが、この評論には書かれています。これはそのまま昆虫を子どもに置き換えても、学校で飼育する動物に置き換えても良いと思います。つまり、外側から見てかわいいと思うだけではなく、内側に入ってみて、たとえばウサギの中に入ってみて、ウサギの目で見てどう見えるのかを考える。そこから新しい感性が生まれてくるのではないかと思います。南吉の作品に、「嘘」、「屁」、「久助君の話」という少年小説がありますが、これは少年の心の内側を非常に見事にとらえています。学校で飼育する動物についても、その内側に入ってみてみる。南吉の文学もそういったところに繋がっているのではないかと思います。

最近、「かわいい」とか「やばい」とか、短くて乱暴な言葉が横行し、それで通じてしまうところがあります。是非、このような文学作品に触れ、文学作品から美しく正しい言葉を学んでほしいと思います。それには直接本物に触れることが大切であり、文学作品に触れる意味がそこにあるのではないかと思います。

南吉の文学は、優しさにあふれた文学だと思います。それは、4歳で母をなくした経験から、母への思慕の情念が常に心の中にあるため、動物や小さい命に注ぐ眼差しが非常に優しい。そういうところから南吉文学が生まれてきたのだと思います。南吉の作品は、幼年童話、少年小説、民話的メルヘンと大きく3つに分かれますが、その辺を踏まえながら、南吉の作品に触れていただければと思います。